

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

笑雲瑞訢

笑雲瑞訢は、15世紀に日本と中国の間を往来した遣明使節です。室町時代の臨濟宗五山派の禪僧ですが、生没年、生誕地は不詳。しかしながら、宝徳度遣明船の1号船に乗り込んで京都―北京間を往復し、その際の見聞を日記として詳細に記録しています。これによって、当時の遣明使節の活動実態が明らかになりました。

宝徳度の遣明船は、將軍足利義政の代始めに送られたものです。使節団は宝徳3(1451)年10月に京都を出発し、翌年正月に九州の博多に到着。渡航準備や順風待機のため、実際に出航したのは享徳2(53)年3月でした。

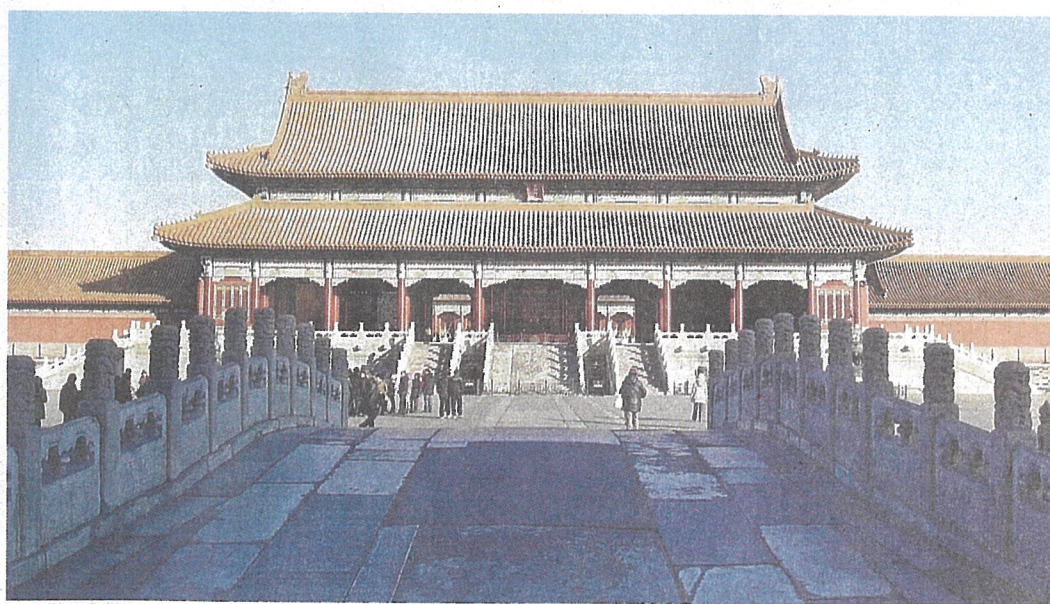
この回の遣明船は9艘からな

る大船団で、笑雲が乗った1号船は天龍寺が経営するものでした。その正使の東洋允海をトッブに、副使・從僧・通事・客商・水夫らが乗り込みました。1艘におよそ150～200人が乗船した中で、從僧の笑雲の役割は、明側の応対者と交流し、記録することだったようです。

景泰4(53)年4月20日、1号船は浙江省の寧波に到達。日記では、この日から明年号「景泰」を用いています。帰途で日本年号「享徳」を用いたのは、長門の赤間関(山口県下関市)到着時で、このそれぞれが入国・帰国の日と意識されていたことが分かります。

寧波には約3カ月半滞在し、明政府から許可が下りて8月6日に北京への途に就き、9月末に到着。目的地の北京では、10月5日の朝参で第7代皇帝の景

北京を訪れた遣明使節の僧



泰帝に謁見を遂げます。その後28日には、日本からの進貢物の箱が75面の車に積まれて当地の会同館に到着。11月8日の朝参の際、紫禁城の奉天門で献上の儀式が催されました。

また、越年した元日朝賀の儀式では、帝が奉天殿に出御すると、万歳三呼が地を揺るがすのを目撃。さらに、正月11日と翌日に催された帝の天壇行幸では、奏樂者数千人、宝玉を背負う象3頭、六龍車(皇帝が乗る車)2台、帝を護衛する武官数万人、騎馬甲冑兵36万人の大行列を見物しています。

この他に笑雲らは、第三国からの使節とも触れ合つて国際交流をしています。紫禁城内には、ラマ(チベット)・回々(ウイグル)・韓旦(モンゴル)・女真(四川・琉球・安南(ベトナム)・爪哇(インドネシア)からの進貢使節が滞在していました。会同館では、爪哇使節と交流し、また、回々使節の宿舎を訪ねて回々文字(ウイグル文字)を見。韓旦人たちはラクダ20頭を従えていた、とも記しています。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載

笑雲らが景泰帝への進貢物献上儀式を催した紫禁城の奉天門(現太和門)